

飛べ「天空のレタス」



⑤好評だった「川上村レタス」の生春巻き＝ベトナム・ホーチミン市、ライ・タイン・ビン氏撮影
⑥苗の植え方を指導する長野県川上村の川上芳夫副村長(右)＝ベトナム中部ダラット、佐々木学撮影



丹精込めて栽培したレタスを手にとる土農統さん(左)と花岡貴也さん(ベトナム中部ダラット、花岡さん提供)



長野の法人、ベトナムで農法伝授

農家の平均年収約2500万円を実現した長野県川上村の「天空のレタス」が、東南アジアのベトナムで栽培されている。東南アジア諸国連合(ASEAN)の経済統合や環太平洋経済連携協定(TPP)への参加による市場の拡大を見据え、ベトナム産の日本野菜として定着させようとの試みだ。



長野県川上村

千曲川の最上流部にある長野県東部の村。役場の標高は1185メートル、人口は約4千人。村営バスの黒字化や24時間オープン図書館といった特色ある村づくりで過疎化を克服。農家の平均年収(売り上げ)が2500万円を超える豊かな村となり、「奇跡の村」と言われた。高原で収穫される高品質のレタスは「天空のレタス」として知られる。

市場拡大を見据え進出

ベトナム中部ダラット。高原に洋風コテージが立ち並び、異国情緒が漂う。フランス植民地時代に避暑地として開発された高原リゾートだ。市の中心部から西へ約15キロ、標高約1500メートルの山間に日本のレタス産地、長野県川上村の若者らが開墾した2畝の畑が広がる。

「これから将来、世界に向けて安全な野菜を輸出したいんです」と花岡貴也さん(36)は言う。フィットネスクラブの指導員から農業スクラップの指導員から農業に転向し、2年前から川上村の農業法人ラクエドレタス栽培を手がけてきた。ベトナムで企業誘致などのコンサルタントをしている土屋泰統さん(67)の仲介で昨

スコール葉に穴・水牛がへろり

11月、初めてダラットを訪れた。マツで覆われた山々と涼しい気候、川上村に似た風景に可能性を感じた。水質はいいが土質は硬く、石がゴロゴロしている。現地に住み込み、手作業で石を拾い、データ分析をしながら堆肥を色々と試した。1カ

ただ、課題もある。収穫直前、川上村にはないスコールに見舞われ、レタスの外側の葉に穴が開いて傷だらけに。水牛に約200玉を食われてしまうハプニングも。大消費地のホーチミン市までトラックで約7時間。鮮度を保つには朝5時の涼しい時間に収穫し、特殊な機械を使って真空状態で5度まで冷却。保冷車で運ぶ必要がある。手間がかかるので、価格は現地レ

日本の技術高い関心

ベトナムのチュオン・タン・サン国家主席は3月に来日、農業分野での協力強化を呼びかけた。潜在中、茨城県の農業施設を訪問したほか、川上村の藤原忠彦村長とも東京で面会。メコンデルタを抱え、米やトウモロコシ、野菜などが広範囲に栽培されているベトナムの農業は、最も成長が期待される分野の一つだ。すでに北部ハイズオン省機関「農業農村開発政策戦略研究所」の2年前の調査によると、ベトナムの畑で農業や化学肥料の使用量は

月の試行錯誤で土質の改良に成功。今年1月から栽培を始めた。ダラットに狙いを付けたのは、朝晩の寒暖の差が大きくて野菜作りに適していることと、冬でも平均気温14度と寒くなりすぎないことだ。川上村では冬場は栽培できないが、ここなら一年中レタスを栽培できる。ベトナムの人口は約9千万人で、さらに増加中。ASEANの経済統合やTPP加盟が進むと、ベトナム市場はぐっと広がる可能性を秘める。2月には同村の川上芳夫副村長(67)も視察に訪れ

では商社が農業関連事業を検討中。日本の農業進出がベトナムで進んでいる。一方、ベトナム国内では、経済成長に伴って中間所得層が増えており、食の安全への関心も高い。ハノイやホーチミン市の街中で「有機栽培」と銘打った青果店が数多く見られるようになった。ただ、ベトナム政府関連機関「農業農村開発政策戦略研究所」の2年前の調査によると、ベトナムの畑で農業や化学肥料の使用量は

(ダラット)佐々木学